

環境を通して行う保育に関する一考察 —乳幼児に関わる保育者の人的環境としての役割—

A Consideration on Childcare Conducted Through the Environment —Role as a human Environment of a Childcare Person Involved in Infants—

(2019年3月29日受理)

平 松 美由紀
Miyuki Hiramatsu

Key words : 乳幼児, 環境, 保育, 保育者

要 約

人は生まれたときから母親の腕の中に抱かれ、肌と肌のふれあいの中で人の温かみを感じ、その「ふれあい」によって、乳幼児（以下、子どもまたは子どもたちと称する）は安心感をもって生活している。しかし、子どもたちは家庭を離れ、母親との信頼感から離れた保育所・幼稚園・こども園といった集団の中で新しい人間関係を築いていくこととなる。子どもたちが初めて他者と生活する「社会」となる保育所、幼稚園、こども園の中で保育士や幼稚園教諭、保育教諭は重要な役割を担っている。この役割について考えると本研究の動機がある。

そこで本研究では、子どもに関わる保育者が、人的環境としてどのような役割を認識しながら保育実践に携わっているかについて検討することを目的とした。この目的を達成するために、次の手順を踏んだ。〇市、K市の保育所3園、幼稚園4園・こども園3園に勤務する保育者80名を対象としたアンケート調査を実施した。

その結果、保育者は人的環境としての保育者の存在について、100%が「毎日意識している」という結果であった。さらに、保育者が人的環境としての役割を担っていることを自覚する場面は「身体でのふれあい」場面が最も多く、次いで「子どもが不安定な時」「午睡」という結果であった。つまり、子どもと保育者の非言語による関わり場面で最も人的環境としての役割を自覚していることが明らかとなった。相互に身体にふれることを通して、子どもたちがはじめて身を置く小さな社会の中で安心して生活できるよう、また、心のよりどころとなるよう、保育者の役割を大事にしていることがわかった。保育者が保育における人的環境としての保育者役割の重要性をもう一度見つめなおすことで、より子どもたちの「心にふれる」ことができると推測された。

問題と目的

人は生まれながらにして、自ら成長していく力や周囲の環境に対して自ら働きかけようとする力を持っている。

このこと西暦1931年に倉橋惣三は次のように述べている。

幼児期教育の本義は、どういうことであるかというに、

まず第一に考えるべきは、根の教育ということである。根とは、一切の生長のもとであり、無限の生長でもある。その生長力そのものを閉ざすことなくひらき、縮むことなく發せしめて、生々澆瀨の勢いを、伸びるだけ伸ばすことこそ、幼児教育の本義である。急いで花を咲かすことでもなく、強いて箕を結ばせることでもない。そういうことはのちの仕事である。ただ強い生長力そのものを育てることを専一とする。生長力の強いものにしておけば、のちは、その力が自ら一切を生み出してゆく。幼児

期において、その生長力を伸ばさずにおいて真の発達を期待することはできない。その根を根として充実させることが、幼児期教育の第一義である。

根の特質は発達力のもとであるばかりでない。更に著しいことは、一切を内蔵しながら未だに枝とか葉とか花とかに分かれていない点である。之を未分化の状態という。ものが発達することは次第に分化してゆくことであるから、未分化はまだ発達の低い階程たるに違いないが、未分化には未分化の特有の意義となる価値がある。之を渾一性ということが出来る。こまごまと小さく細分しない、全的の生活である。従って、幼児期の教育は渾一たる全的生活を、そのままに充実させてゆくところに、実質的な大きな本義があるといえるのである。

倉橋は子どもの生長力について、自ら力を持ち、その力は無限にあることをこのように論じている。そして、その力をしっかりと培う時期こそが幼児期であり、幼児教育の重要性を強く日本に示したのである。

また、乳児期から幼児期へと発達の過程を経て、子どもたちは自分を表現したり、学習したりする場を求めて活発に動き始める。

保育所保育指針解説によると乳児保育の基本的事項として次のようにある。

乳児期は、心身両面において、短期間に著しい発育・発達が見られる時期である。生後早い時期から、子どもは周囲の人やものをじっと見つめたり、声や音がする方向に顔を向けたりするなど、感覚を通して外界を認知し始める。-中略-人との関わりの面では、表情や体の動き、泣き、喃語などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成されるとともに、人に対する基本的信頼感を育てていく。また、6か月頃には身近な人の顔が分かり、あやしてもらおうと喜ぶなど、愛情を込めて受容的に関わる大人とのやり取りを楽しむ中で、愛着関係が強まる。

つまり、子どもにとって保育者は、自分主体としてまると受容してもらえる存在であり、その関わりは子どもの育ちにとって大きな影響があることが分かる。子どもの欲求は、生まれながらにある生きるための基本的な

欲求であり、この欲求をほどよく満たされることは第一義的に重要である。子ども自身のペースを尊重され、タイミングよく関わってくれる保育者を土台とし、子どもがもっと人とかかわりたい、認めてほしいという心理的欲求がさらに育っていくのである。保育者は一人一人の子どもを独立した人格をもつ存在として受け止め、信頼と思いやりをもって応答することが求められているのである。そして、今、保育者の存在は、大きく注目されている。

そこで、本研究では、子どもに関わる保育者が、人的環境としてどのような役割を認識しながら保育実践に携わっているかについて検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

〇市、K市の保育所・幼稚園・認定こども園に勤務する保育者：80名

保育所：3園 保育士：30名

幼稚園：4園 幼稚園教諭：20名

認定こども園：3園：30名

2. 調査期間

平成29年8月10日～平成29年10月30日

3. 調査方法

10設問の郵送自記式アンケート調査を行った。

| | 調査人数 | 回答数 | 回収率 |
|------------|------|-----|------|
| 保育所（3園） | 30人 | 30人 | 100% |
| 幼稚園（4園） | 20人 | 20人 | 100% |
| 認定こども園（3園） | 30人 | 30人 | 100% |

4. 倫理的配慮

アンケート調査対象者には、調査の目的と調査者の権利について説明を行い、調査への同意を得たものとした。また、調査のデータについては厳重に保管し、調査の目的以外には使用なく、外部に漏れることのないことも加えて説明を行った。

結 果

1. 対象者の年齢

図1は、対象者の年齢についての結果を示したものである。今回、アンケート調査を行った対象者は保育所・幼稚園・こども園の合計でみると、20代が18名、30代が32名、40代が20名、50代が10名という結果であった。30代が最も多い人数であった。幼稚園のみでの結果をみると40代が7名、次いで30代6名、20代5名、50代2名であり、ミドルリーダー的年齢が最も多い人数であった。しかし、保育所では、30代14名と最も多く、次いで20代7名、40代6名、50代3名であった。同様にこども園でも30代12名と最も多く、次いで40代7名、20代6名、50代5名であった。今回、対象とした園での結果であるため、さらに調査を広げるとこの年齢配分には、変容が見られると思われる。

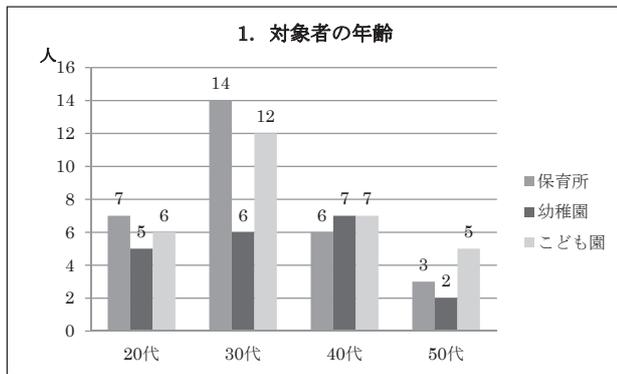


図1

2. 対象者の経験年数

図2は、対象者の経験年数をまとめたものである。担任保育者として勤務した年数についての回答を得たものである。つまり、臨時保育者として勤務していた経験がある中でも担任をもったことがある経験を含んだ回答を得た。この結果をみると、全体では、5～10年未満が25名と最も多く、次いで20年以上が18名、1～5年未満が17名、10～15年が9名、1年未満が6名、15年から20年未満が5名という結果であった。年齢と照らし合わせてみると、20代～30代の人数が50名であるが、担任として勤務した経験が10年未満の保育者が多いことが分かる。また、20年以上の保育者も18名ということより、担任をもち、継続勤務している保育者が多いことが分かる。

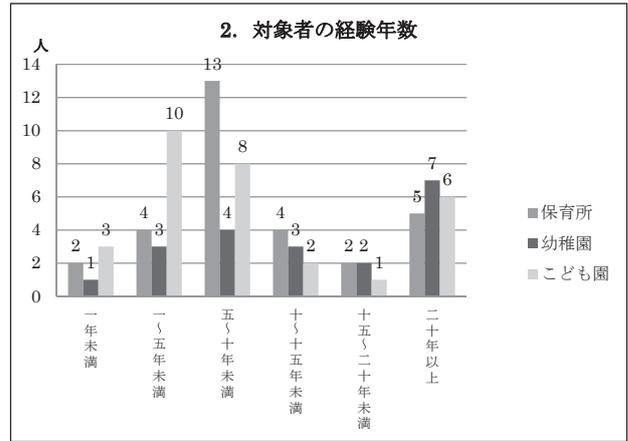


図2

3. 人的環境としての保育者を意識しているか

図3は、人的環境としての保育者自身の意識についての問いである。6件法により得た回答であるが、保育所30名、幼稚園20名、こども園30名のすべての保育者が「非常にあてはまる」という回答であった。

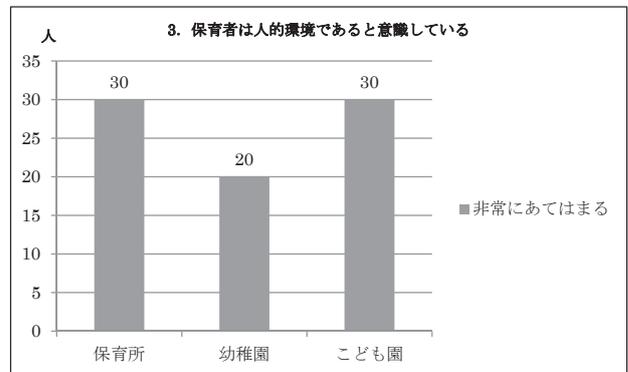


図3

4. 人的環境としての保育者をどの場面で感じるか

図4は、保育者自身が人的環境としての保育者をどの場面で最も感じるかについて記述にて回答を得た結果である。全体で最も多い回答は、「身体でのふれあい」であり、23名であった。次いで「子どもが不安定な時」20名、「午睡」14名、「登園」9名、「クラス活動」6名、「生活習慣」5名、「食事」3名という結果であった。園別にみると、保育所で最も多かった回答は「子どもが不安定な時」10名、次いで「身体でのふれあい」と「午睡」8名、「登園」「食事」「生活習慣」「クラス活動」は1名の回答であった。幼稚園では「身体でのふれあい」が最も多く8名、次いで「登園」6名、「クラス活動」4名、

「子どもが不安定な時」2名であった。「食事」「生活習慣」「午睡」は回答者が0名であった。こども園では、「子どもが不安定な時」8名で最も多く、次いで、「身体でのふれあい」7名、「午睡」6名、「生活習慣」4名、「登園」「食事」が2名という回答結果であった。

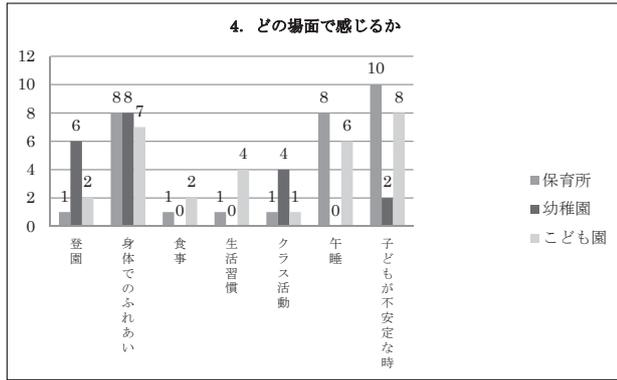


図 4

5. 保育者の役割は何か

図 5, 6, 7 は、保育者の役割は何であるかという設問に対する各園別の記述回答の結果である。それぞれの記述回答より頻出する単語を抜き出し、さらに関連するグループに分類し、カテゴリー別に集計した。

まず、図 5 は保育所の保育者の回答結果である。頻出した単語数は146語であった。その単語をさらにグループ化したところ、次の7つに分類された。「命を守る」「情緒の安定」「生活を保障する」「発達を支える」「遊びの環境作り」「保護者の代わり」「子どもが信頼をおく」となった。そのうち、最も多い結果は、「情緒の安定」20%であった。次に「命を守る」18%、「保護者の代わり」16%、「生活を保障する」「発達を支える」「子どもが信頼をおく」12%、「遊びの環境作り」10%であった。

次に図 6 は幼稚園の保育者の回答結果である。頻出した単語の総数は112語であった。同様に分類すると次の8グループとなった。「心のよりどころ」「安全基地」「遊びの援助者」「遊びの仲間」「発達の援助者」「学びの援助者」「子どもの理解者」「環境をつくる」であった。最も多いものは、「環境をつくる」17%、次に「発達の援助者」「学びの援助者」15%、「心のよりどころ」14%、「遊びの援助者」13%、「安全基地」「子どもの理解者」7%という結果となった。

さらに図 7 は、こども園の保育者の回答結果である。

頻出した単語の総数は、119語であった。「安心安全」「生命の保持」「遊びの援助者」「養育者」「発達を支える」「情緒の安定」の6つのグループに分類された。最も多い結果となったのは、「生命の保持」「情緒の安定」23%、次に「安心安全」18%、「発達を支える」15%、「遊びの援助者」13%、「養育者」8%という結果となった。

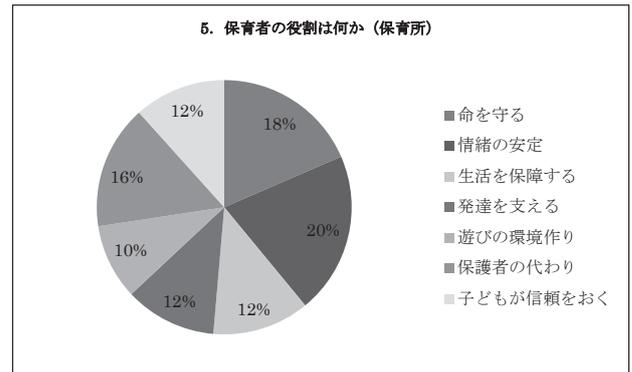


図 5

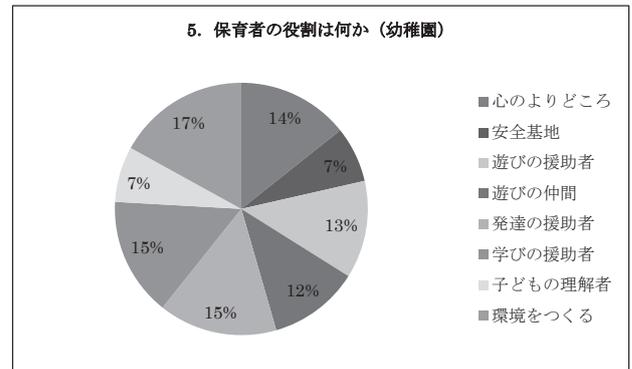


図 6

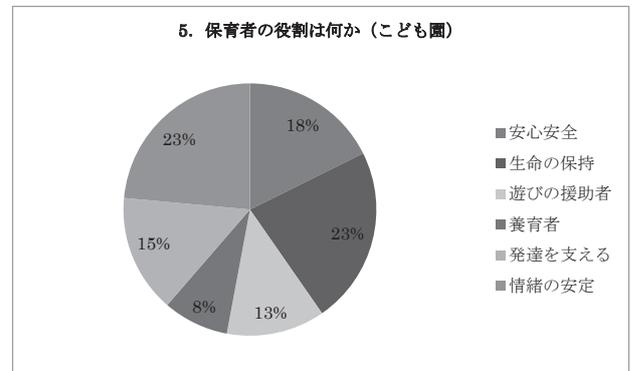


図 7

考 察

1. 勤務場所による保育者の役割認識

保育所・幼稚園・こども園に勤務する保育者80名は、

全員が保育者は人的環境であることを意識していることが分かった。平成30年4月より実施となった保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、保育者の役割について改めてその重要性は示されている。例えば、保育所保育指針には、養護に関する基本的理念とし、次のようなねらいが示されている。

イ. 情緒の安定

- ① 一人一人の子どもが、安定感をもって過ごせるようにする。
- ② 一人一人の子どもが、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。
- ③ 一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれるようにする。
- ④ 一人一人の子どもがくつろいで共に過ごし、心身の疲れが癒されるようにする。

ここに示されるねらいに沿って保育者は、日々の保育を実践し、一人一人の子どもに関わるのである。さらに、具体的指導内容として、保育者が一人一人の心身の状態や発達過程を把握したり、個々の子どもの欲求を受け止めたりすることも示されている。特に乳児に関して、肌と肌のふれあいの温かさを実感することで、人との関わりの心地良さや安心感を獲得することが指摘されている。

また、幼稚園教育要領には、第1節幼稚園教育の基本の中に教師の役割として次のように示されている。

幼稚園における人的環境が果たす役割は極めて大きい。幼稚園の中の人的環境とは、担任教師だけでなく、周りの教師や友達全てを指し、それぞれが重要な環境となる。特に、幼稚園教育が環境を通して行う教育であるという点において、教師の担う役割は大きい。一人一人の幼児に対する理解に基づき、環境を計画的に構成し、幼児の主體的な活動を直接援助すると同時に、教師自らも幼児にとって重要な環境の一つであることをまず念頭に置く必要がある。

このように、幼稚園教育要領には、明確に人的環境としての保育者の役割が示されている。子どもの遊びを中心とした教育を実践することは基より、子どもとの信頼関係を十分に築き、適切な関わりをする役割、物的・空

間的環境を構成する役割が必要となる。

また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、第1節(2)環境を通して行う教育及び保育の中に人的環境としての保育者について次のように示されている。

園児の健康と安全を守ることは、幼保連携型認定こども園における基本的かつ重大な責任であるといえる。~中略~園児が、保育教諭等と共に生活する中で、人やものなどの様々な環境と出会い、それらのふさわしい関わり方を身に付けていくこと、すんわち、保育教諭等の支えを得ながら文化を獲得し、自己の可能性を開いていくことを大切にした教育及び保育なのである。園児一人一人の潜在的な可能性は、園児が保育教諭等と共にする生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。それゆえに、園児を取り巻く環境がどのようなものであるかが重要になってくる。

このように子どもに関わる環境での学びを可能とするには保育者の間接的、直接的なかわりは何より重要であり、一人一人の園児の意欲を大切に受け止めることは周知であろう。さらに、保育者の動きや態度が子どもたちの安心の源であり、子どもの視線が保育者に注がれていることも事実である。乳幼児期のよきモデルとして環境への関わり方を示すことが、人的環境としての大きな役割であるといえる。

2. 子どもに関わる場面での保育者の役割認識

保育所、幼稚園、こども園に勤務する保育者は、それぞれに子どもたちとの生活を送っている。しかし、今回の調査において、どの場面で人的環境としての役割を感じるかという設問にやや差異が見られた。このことは、子どもたちの園での生活スタイルの違いにあるのではないだろうか。まず、保育所やこども園では早朝より、夕方までの長時間の生活スタイルで過ごしている子どもが多く、午睡の時間や子どもの心が不安定になる場面に保育者が意図を自覚していることがあるのであろう。さらに、幼稚園では、登園時、身体でのふれあいといった1日の園生活のスタートから流れるような保育時間での些細な場面でも保育者が自分の役割を自覚しながら過ごしていることが伺える。

このことは、それぞれの園において1日の子どもたちの生活時間の流れに保育者が何を重要と考え援助してい

るかに関与していると思われる。しかし、2019年3月実施の3法令においては、どの施設でも質の高い保育を提供することが示された。保育者は、子どもを目の前にした時、その子の確かな育ちを保障する責任があることを自覚し、勤務する施設の違に関わらず、すべての子どもに同じ保育を提供することを念頭に置かねばならない。

ま と め

本研究では、子どもに関わる保育者が、人的環境としてどのような役割を認識しながら保育実践に携わっているかについて検討することを目的とした。得られた結果の概要は次の通りである。

- 1) 保育者自身が人的環境としての保育者をどの場面で最も感じるかについて記述にて回答を得た結果は、全体で最も多い回答は、「身体でのふれあい」の23名であった。このことは、保育という営みが、子どもと保育者の身体によるコミュニケーションであることを示唆している。保育者との非言語のコミュニケーションが、子ども達のこの先の対人コミュニケーション能力の育ちに影響があることは明白であろう。
- 2) 保育者の役割の認識については、保育者が勤務する各施設よっての差異が生じた。これは、それぞれの施設における子どもの生活時間の異なりによるものであると推測される。また、保育所・認定こども園では、保育に欠ける子どもを保育することが大きな役割として掲げられている。このことより、保育所保育指針、並びに幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示されている保育の目標としての生命の保持、情緒の安定は、保育者が常に自覚している保育者の役割であることが伺えた。

保育者は、日々、子どもたちとの生活を営んでいる。その営みは、「愛情」を抜きに考えることはできない。倉橋は、育ての心の序に次のように示している。この言葉を私たち保育者が、どのように捉えていかを今一度、立ちどまって考えてみる時なのではないだろうか。

自ら育つものを育てようとする心。それが育ての心である。世にこんな楽しい心があるだろうか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものと、互いの結びつきに於て相楽しんでいる心である。

育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの偉きな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遵うて発達を遂げしめようとする。役目でもなく、義務でもなく、誰の心にも動く真情である。

引用・参考文献

- (1) E.H. エリクソン/仁科弥生訳：幼児期と社会 I, みすず書房, 2001.
- (2) E.H. エリクソン/近藤邦夫訳：玩具と理性 経験の儀式化の諸段階, みすず書房, 2000.
- (3) 林修: 身体教育における人格発達に関する一考察, 体育・スポーツ哲学研究, 2005.
- (4) 石橋智恵: 親と子によるふれあいコミュニケーションに関する研究
- (5) 池上貴美子/丹下裕子: 幼児の表象理解と愛着の関連についての検討, 教心第50回総会, 2008
- (6) 倉橋惣三: 倉橋惣三選集第三巻, フレーベル館, 1965
- (7) 厚生労働省: 保育所保育指針, 2019.
- (8) 厚生労働省: 保育所保育指針解説, 2019.
- (9) 文部科学書: 幼稚園教育要領, 2019
- (10) 文部科学書: 幼稚園教育要領解説, 2019
- (11) 内閣府/文部科学省/厚生労働省: 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, 2019.
- (12) 内閣府/文部科学省/厚生労働省: 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説, 2019.
- (13) 辻野順子: 子どもの脈派と母親の愛着の関連性を検証する-カオス解析による検証-, 関西女子短期大学紀要第19号, 2009.
- (14) 山口創: 皮膚感覚の不思議, 講談社, 2006
- (15) 山口創: 子どもの脳は肌にある, 光文社新書, 2010
- (16) 山口創: 皮膚という脳, 東京書籍, 2010
- (17) 吉井正美: 乳幼児教育の事業化に関する考察-社会性獲得プロセスとしての応用-, 高知工科大学大学院工学研究科, 2008